

経済事象と経済小説

——事実と虚構の葛藤——

杉 江 雅 彦

- I 開題
- II 通俗小説の誕生－尾崎紅葉『金色夜叉』
- III 文学の社会化－横光利一『家族会議』
- IV 経済小説の開祖・城山三郎
- V ノンフィクションとフィクション
 - 1 ノンフィクションの存在意義
 - 2 史実と虚構の葛藤－松本清張『西郷札』
- VI 経済小説の展開－結論に代えて

I 開 題

「事実は小説より奇なり」という言葉がある。しかし作家は、現実¹に起こるさまざまな現象や事件からヒントを得て、文学作品を構成することがある。それは、現実¹に起こり、あるいは過去に起きた事象¹が、作家の創作意欲を刺激するからであるにちがいない。

それでは、経済事象にもこのことが当て^{はま}るのであろうか。本稿では、この答を求めて、わが国における近現代文学史の系譜をたどりながら、経済事象を小説の中に取り込んだ作家の足跡を探り、経済小説という文学領域の成立と、その位置づけを行うことを目的としている。

さらに合わせて、現実あるいは史実と虚構の関係についても、個別作品に則して検討を加えることにしたい。なんといっても、小説と現実・史実との狭間には、作家にとっていかようにでも空想力を発揮できる余地があると考えられるからである。

II 通俗小説の誕生－尾崎紅葉『金色夜叉』

1884年（明治18年）に、坪内逍遙が『小説神髓』という文学論を発表した。逍遙はその中で、「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」と断じ、小説が芸術であるためには、まず人情（人間の情欲）の内幕を真にうが¹つ、写実に徹しなければならな

1 現象と事件を合わせて事象と呼んでおく。

い、人間の心理に反する無理な筋をつくってはいけない、と力説した²。

現在の東京大学の前身である東京帝国大学の出身者で、西洋近代文学の素養を持つ逍遙が、日本にも西洋の小説（ノベルス）に引けをとらない文学を樹ち立てるべきだと檄げきをとばしたことに影響を受けて、文学の道に志す若者達が現れた。二葉亭四迷や尾崎紅葉もその中にいた。

四迷の『浮雲』は、わが国の近代文学最初の作品と評価されることが多いが、ここでは四迷ではなく、紅葉の『金色夜叉』を取り上げようと思う。紅葉は逍遙の東大の後輩であるが、四迷が西洋の近代文学に強い影響を受け、それを模倣しながら自己の文学的基礎を築いていったのとは対照的に、江戸時代の庶民文学を近代的立場から再発見し、再構成するという態度に徹した。それは、逍遙の『小説神髓』が江戸文学のなかでも、いわゆる人情本の再評価、再出発を主張していることに勇気づけられたからでもあった³。

紅葉の代表作となった『金色夜叉』は、1897年（明治30年）から「読売新聞」で連載がはじまり（しかし未完に終わった）、満天下の子女を熱狂させた。そこでは、金と恋愛という人間の情欲を主たるテーマとして、波乱に満ちたストーリーを展開している。もちろん、この作品を経済小説の範疇に位置づけることはできないにしても、主人公の青年が金のために高利貸になるというテーマは、現代にも通じる普遍性を持っているということはあると思う。ここで、『金色夜叉』の概要を示しておこう⁴。

主人公の間貫一は、亡くなった父が恩を掛けた鴨沢隆三から学費を出してもらい、同家に住んで高等中学校に通っていて、間もなく帝国大学に進学する予定だった。隆三夫妻の一人娘・宮とは相思相愛の関係にあり、行く行くは二人は結婚する積りでいた。

ところが、正月のかるた会の席上、稀にみる美人の宮を見染めた富山唯継が、金の力に物を言わせて強引に鴨沢夫婦を口説き落とし、宮と結婚することになった。そのことを隆三から聞かされた貫一は、一月十七日の夜に熱海の海岸で宮の心変わりを責め、散々罵倒した揚句、宮の前から姿を消してしまった（前篇）。

宮と別れた貫一は、宮を恨み、鴨沢夫婦を恨み、金が敵の世間を憎んで、事もあるうに高利貸・鰐淵直行の手代（というより直行の顧問）として現れる。同業者であり、これも美人の赤檜満枝は貫一に一目惚れして、事あるごとに積極的に言い寄るが、貫一はまったく相手にしようとしない。

一方、富山に嫁した宮は、思いがけず出会った貫一の住所を探し出して、恋文を出し

2 奥野健男『日本文学史－近代から現代へ』1970年、中央公論社（中公新書）、24ページ。

3 同書、31ページ。

4 尾崎紅葉『金色夜叉』（上下巻）1902年（岩波文庫版1939年）。

続けるが、宮に裏切られた無念に凝り固まった貫一は、封を切って見ようともしない。宮は唯継と結婚したものの愛情を持つことができず、また富貴な生活にも飽きて、ひたすら貫一を恋い慕って体調を崩してしまう（中篇）。

貫一は、高利貸の商売を非情なやり方で続け、その辣腕^{らつわん}ぶりに直行もますます信頼を寄せるようになる。直行には直道という息子がいて、ひたすら父親に高利貸から手を引くように諫言するが、直行は一向に聞き入れず、かえって高利貸の必要性を直道に得々と話すばかりである。

ある日、直行の家に見知らぬ老女が訪ねてきて、直行に恨みの数々を言い募った。どうやら、その老女の息子が知人に騙されて借金の連帯保証人になったため、結局は私文書偽造の罪で刑に服することになった。それを苦にした母親が乱心してしまったのである。狂女は八日間、直行の家に現れ続けたが、くだんの狂女が現れなくなってほっとした直行夫婦が寝入ったその夜、火災に見舞われて二人とも焼死してしまった。

慌てて駆けつけた直道は、これも病院からとんできた貫一に向い、「残された父の財産は貴方にあげるから、金貸しをやめて、人の益になる商売をしてほしい」と諭した。貫一は直道の申し出に、思わず涙ぐんだ（後篇）。

直道の計らいで直行の資産を譲り受けた貫一は、焼失した居宅の跡に新宅を建て、そこで相変わらず高利貸を続けていた。そんなある日、高等中学校時代の親友で貫一が兄事していた荒尾譲介が訪ねてくる。大学を卒業して官員となり、愛知県参事官として赴任する荒尾を、貫一は駅のホームの隅でひそかに見送ったことがあった。しかし、何年ぶりかで貫一の所に現れた荒尾には、その時の面影はなく、尾羽打ち枯らした風態に貫一は目を見張る。

そこへ満枝がやってきて、荒尾が彼女を見て憤然と立ち去ってから、荒尾が満枝から高利の金を借りていると聞かされた。荒尾に学費を援助していた政治家が、選挙資金を借りる時に荒尾が連帯保証人になったため、債務責任が荒尾にも生じたという話だった。

ある日、宮が突然、貫一の家を訪れた。二人は口論となり、貫一は家を出て行ってしまった。そのあとから満枝が訪れてきて、宮を見るなり嫉妬の炎が燃え上がった。そこへ再び貫一が戻ってくると、満枝は懐から短刀を取り出し、貫一に宮を殺せと叫ぶ。宮と満枝、貫一の三人が短刀を取り合おうとしている間に、はずみで宮が満枝を刺し殺し、自らも喉を突いて死んでしまう……しかし、それは貫一が見た夢だった（続篇）。

『金色夜叉』は、1897年（明治30年）1月から連載がはじまったが、途中、何回かの中断を繰り返した後、1902年（明治35年）5月11日で、未完のまま連載が終了している。その間に、読者からの要望が相次いだのか、あるいは紅葉自身の構想が変わったの

か、その辺りはよくわからないが、どうもストーリーが一貫しておらず、矛盾した場面も見受けられる。しかし、ここでは、『金色夜叉』の批判をするのが目的ではないので、この点は省略しておきたい。それよりも、紅葉が本書の中で金や金貸しについて、どう考えていたのかを知ることの方が重要だと思われる。

紅葉は芸人の息子で、江戸時代の戯作文学に通じていたから、近松や西鶴の作品の中で繰り広げられた、金をめぐる男女の恋という絵図は空^{そら}んじていたにちがいない。したがって、『金色夜叉』の中でも高利貸の生きざまを活撮することができたのであろう。明治時代に入っても、高利貸という商売や職業は、社会の“必要悪”として存在し続けていたのである。

江戸時代には、徳川幕府は貸出利息の上限を年率12パーセント（後半は15パーセント）と定めていたが、実際にはこの利率よりはるかに高い金利で貸す庶民金融が発達していた。たとえば、天下御免の座頭貸しをはじめ、日銭貸し（百一文貸しともいう）や烏金（からすがね）など、年率1,000パーセント以上にもなる高金利がまかり通っていた。借入者の大部分はその日暮しの小商人だったから、短期金融が中心であった。

明治期に入ると、政府は1877年（明治10年）に利息制限法を制定して、その上限金利を20パーセントと定めたが、その法律には刑事上の罰則規定がなかったため、それよりもはるかに高い金利で貸す、いわゆる高利貸しが存在し得たのである。

『金色夜叉』に戻って考えると、貫一が借入者に課していた貸付条件は、たとえば次のようなものであった。

貫一は彼らの騒ぐのを尻目にかけて、「90円が元金、これに加えた27円は天引の3割、これが高利貸しの定法です」

つまり、この場合の金利は30パーセントであるが、これは1年分ではなく3カ月分であるから、年率に引き直せば120パーセントということになる。つまり、元金よりも利息の方が多岐勘定である。

それでは、貫一が宮に裏切られた恨みをはらすために、何故、高利貸という仕事をえらんだのか。その理由を、貫一は彼を狂気のごとく慕う赤檜満枝を前に、こう言って聞かせる。

「御承知か知りませんが、元私は書生でありました、それが中途から学問を罷^やめて、この商売を始めたのは、放蕩で遺損^{やり}ったのでもなければ、敢て食窮^{くいっ}めた訳でもありませんので。書生が可厭^{いや}さに商売を遣ろうというのなら、未だ外に幾多も好い商売はありますさ。何を苦しんでこんな極悪非道な、白日盗をなすと謂おうか、病人の喉

口を干すと謂おうか、命より大事な人の名誉を殺して、その金銭を奪取る高利貸などを扱ふものですか」

「実に頼たより少ない世の中で、その義理も人情も忘れて、罪もない私の売られたのも、原もとはといえば、金銭かねからです。仮初かりそめにも一匹の男子たる者が、金銭のために見易みやすえられたかと思えば、その無念というものは、私は一……一……一生忘れられんです」

「売られた人たちを苦しめるようなそんな復讐などはしたくありません。ただ自分だけでいいから、一旦受けた恨！それだけは屹きつと霽はららさなければ惜おかん精神。半時でもその恨を忘れることが出来ん胸中というものは、我ながらそう思いますが、まるで発狂しているようすな。それで、高利貸のような残刻のはなはだしい、殆ど人を殺すほどの度胸を要する事を毎日扱って、そうして感情を暴あらしていなければとても堪えられんので、発狂者には適當の商売です。そこで、金銭ゆえに売られもすれば、辱められもした、金銭のないのも謂はば無念の一つです。その金銭があったら何とでも恨が霽はらされようか、とそれを楽たのしみに義理も人情も捨てて掛って、今では名誉も色恋もなく、金銭より外には何の望も持たんです。また考えてみると、なまじ人などを信ずるよりは、金銭を信じた方が間違がない。人間よりは金銭の方がはるかに頼みになりますよ。頼みにならんのは人の心です！」

明治時代の社会が、高利貸を貫一のように極端な形でとらえていたとは考えられない。ここでは、紅葉が貫一を高利貸の世界にとび込ませるための動機として、このようにデフォルメして示そうとしたのであろう。

その一方で、高利貸側の言い分というか、存在意義について、紅葉は鰐淵直行に次のように主張させており、これも一応筋の通った理屈ではある。息子の直道の諫言に対する答である。

「お前は能ようこの家業を不正じゃの、汚わしいと言うけど、財かねを儲たくわえるに君子の道を行うてゆく商売が何処どこに在るか。我々が高利の金を貸す、如何にも高利じゃ、なぜ高利か、ええか、無抵当じゃ、そりゃ。借る方に無抵当という便利を与うるから、その便利に対する報酬として利が高いのじゃろう。それで我々は決して利の高い金を安やすいと詐いつわって貸しはせんぞ。無抵当で貸すじゃから利が高い。それを承知で皆借るんじゃ。それで何が不正か、何で汚わしいか。利が高うて不当ふたうと思うなら、始はじめから借らんがええ、そんな高利を借りても急すくを拯おかかくくらいの困難が様々にある今の社会じゃ。高利貸を不正と謂うなら、その不正の高利貸を作った社会が不正なんじゃ。必要の上から借る者があるで、貸す者がある。なんぼ貸しとうても借る者がなけりゃ、我々の家業は成立ちはせん。その必要を見込んで仕事をするが則ち営業の魂な

んじゃ」

直行の主張に対して、直道は真向から反論を展開するが、それについてはこれ以上は触れない。しかし、貸手が正義で借手が不正義なのか、それとも、反対に貸手が不正義で借手が正義なのか。この論議は現在でも、賃金業規制のための法制度や政策論でしばしば行われるところでもある。そこで、明治半ば頃、すでにこの種の議論が『金色夜叉』の中でも行われていることに着目して、本稿の冒頭で取り上げることにした。

なお、『金色夜叉』の中では、いくつかの箇所では会話が長々と続く場面がある。なかでも、貫一と宮、貫一と満枝、直行と直道、心中を決意して貫一に救われる男女、などの中の会話は、さすが紅葉と思わせる手練れの文章が続く。「紅葉は会話の場面を得意とし、自信を持っていた⁵」と、杉本秀太郎は述べているが、筆者も紅葉の巧みな筆さばきによって、登場人物の心情の揺れや動きが手に取るように伝わってくる圧倒的な表現力に、思わず引き込まれて読みすすんだことを付記しておきたい。

Ⅲ 文学の社会化—横光利一『家族会議』

尾崎紅葉を大衆文学あるいは通俗小説の原型であるとすれば、横光利一は「純文学にして通俗小説こそが純粹小説である」と主張した最初の作家である。

いきなり、明治期から昭和初期にジャンプするようであるが、もちろんこの間に、日本文学はさまざまな変化を経験してきた。いまここで、その経過を詳細に追うことは、本稿の目的を越えてしまうので、多くを語ることは避けなければなるまい。しかし、横光が新感覚派のリーダーと目され、“小説の神様”と賞揚されるまでの文学史の大きな流れだけは、ここで掴んでおく必要があるようである。つまり、明治から昭和までの間に大正時代があり、この間にわが国の近代文学は成熟期を迎えたからである。

紅葉が1903年（明治36年）に夭折した後、近代文学は西洋の自然主義思想を受け入れる形で、リアリズムに徹する自然主義文学の時代に移った。島崎藤村や田山花袋、それに夏目漱石などがその中心的存在であった。ところが、1910年（明治43年）に起きた幸徳秋水事件を機に、社会主義者や左翼的思想を持つ知識人・文学者達が徹底的に弾圧されると、その輪禍に怯えた作家達は自己の殻に閉じ籠ってしまい、身の体験を告白する私小説へと傾斜していったのである。

大正時代の文学は、反自然主義文学としての私小説、新聞連載を中心とした中間小説、抒情小説などを含めて、さまざまは文芸思潮を展開しているのが大きな特徴である。まさに近代文学の成熟期というにふさわしい。それらを作家の出身校による仲間と

5 杉本秀太郎「解説」『金色夜叉』（岩波文庫版）、253ページ。

いう点に着目して分類すれば、ほぼ次のようになるのではないだろうか。

まず、華族や富裕層の子弟が集まる学習院系の「白樺派」（中心的存在は武者小路実篤）。次いで、東大・一高出身者を中心として結成された「新思潮派」（芥川龍之介が中心）。さらに、久保田万太郎を中心とした「三田文学」系。また、葛西善蔵などの「早稲田派」など。もちろん、上述のような徒党的存在以外にも、一匹狼ながら大きな影響を残した作家達もいたが、彼等の頂点に立っていたのが、森鷗外と夏目漱石であった。

関東大震災の翌年、すなわち1924年（大正13年）には、「文芸時代」と「文芸戦線」という二種類の文芸雑誌が相次いで創刊されている。前者は新感覚派の雑誌であり、後者はプロレタリア文学派の雑誌である。両者はともに、大正時代の文学の特徴であった私小説や心境小説を否定し、「文学の革命」（新感覚派）もしくは「革命の文学」（プロレタリア文学派）をその旗印として掲げたのである。新感覚派の代表的な存在が横光利一であった。

横光は夙に、対象をリアリスティックに表現するのではなく、むしろ対象に触発された感覚や心理やイメージを知的に再構築し、動的で新鮮な感覚的表現を造り出すことを目的とすることで新感覚派と呼ばれた⁶（名付け親は千葉亀雄）、新しい文学運動の推進者であった。『機械』、『寝園』、『紋章』などがその系統の作品である。

ところが、横光が1935年（昭和10年）に発表した『純粹小説論』というエッセイの冒頭で、「もし文芸復興というべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に、文芸復興は絶対に有り得ない、と今も私は思っている」と述べている。⁷「純文学にして通俗小説なる小説」、すなわち横光のいう純粹小説こそが、これから自分がめざす方向だと宣言したのである。その“実験”が、東京日日新聞と大阪毎日新聞に連載された（1935年8月9日～同年12月31日）『家族会議』である。

横光が抱いていた危機感のひとつは、大正末期から昭和にかけて勃興した大衆文学、通俗小説の動向ではなかったのかと思われる。狭義の大衆文学が成立したのは、関東大震災の1、2年後であるといわれているが、⁸これには、出版ジャーナリズムの拡大が大きく寄与しているといわなければならない。すなわち、大衆文学の作品を掲載する受皿である、『読物文芸叢書』（春陽堂）、『キング』（講談社）、『大衆文芸』（二十一日会）などの叢書や雑誌が相次いで創刊されたからである。これらの雑誌の執筆者には、長谷川伸、白井喬二、吉川英治、大仏次郎、直木三十五、江戸川乱歩などが名を連ねた。

純文学の領域でも、『真珠夫人』にはじまる通俗小説の分野を開拓していた菊池寛が、雑誌『文芸春秋』を発刊し、さらにそれを事業として自ら経営するようになって、

6 小田切秀雄「解説」、横光利一『上海』（岩波文庫版1956年）、318ページ。

7 佐々木基一「解説」、横光利一『家族会議』（新潮文庫版1949年）、319ページ。

8 尾崎秀樹『大衆文学』1964年、紀伊国屋書店、19ページ。

純文学畑の作家も続々と通俗小説に進出するようになった。因みに、現在も文壇の登龍門とされる芥川賞と直木賞は、菊池の創案・企画によるものである。

さて、ここからは、横光の純文学“実験作”である『家族会議』に関する検討に入る。もちろん筆者は、この作品も経済小説であるというつもりは毛頭ない。もっとも、「経済小説の分野において、横光は重要な位置を占める」という指摘もあることを紹介しておく。横光は、文学の社会化を目指していたから、『家族会議』で株式市場、株式相場という、資本主義の根源に触れる領域を対象としてえらんだ意図がどこにあったのか、また、株式相場に翻弄される男女の職業と私生活の関係がいかにして展開されるのか、といった点を質していきたいと思う。まず、物語の展開を追っておこう。

東京兜町の株式仲買人（現在の証券会社）の店主である重住高之は、東京の大学を優秀な成績で卒業した、スペイン人に似た浅黒く引き締まった容貌の青年である。高之の父は、大阪北浜で株式の思惑買いをした際、有力仲買人の仁礼文七に売り浴びせられて大損し、それを苦にして亡くなった。それ以来、高之の店は仁礼の傘下に置かれ、高之の自由にならないところがある。高之にとって仁礼は、いわば父の仇であるが、面と向かってはさからえない弱さを持っていた。高之の店を取りしきっているのが、番頭の尾上惣八で、春子はその娘だった。夫に先立たれた春子は、優雅に遊んで暮らしていた。

大阪の仁礼の店には京極練太郎という青年がいて、仁礼は練太郎に信頼を寄せており、一人娘の泰子と一緒にさせてがっている。しかし泰子は高之との結婚をのぞんでいた。練太郎は幼いときから頭脳明哲だが家が貧しく、中学を出ると同時に同郷の仁礼を頼って丁稚に入った。仁礼にみこまれて大学も出してもらっているため、仁礼に対してはもちろん、泰子にも一歩引き下がっているところがある。どこかニヒリスティックだが、敵愾心は強い近代青年だった。

泰子には池島忍という友人がいた。忍は池島信助という裕福な洋反問屋の娘である。温厚篤実な父親とちがいで、忍は贅沢好きで派手な事が好きな現代娘である。もう一人、春子の友人で、高之と同業の梶原定之助の娘清子がいる。泰子、忍、春子、清子の四人は、程度の差こそあれ、高之に好意を寄せている点で共通していたが、肝心の高之は万事に優柔不断で、自分の意志や気持を表に出さないところが、この物語の展開に大きく影響してくる。

仁礼は大阪製紙の株式の過半数を（他人名義で）持っている。大紙の資産状態は良好で、製品も優秀であるが、ライバルである東京製紙の方が老舗で販売網も強力なため、東紙に押されて大紙の販売が伸びていない。仁礼にしてみればそれが我慢できず、東紙の株式の過半数を握って両社を合併させようと目論み、その仕事を腹心の練太郎にやら

せることにした。この計画に成功すれば泰子と結婚させてやると、仁礼は暗黙のうちに練太郎にそう理解させた。

高之と梶原はともに東紙の大株主だった。また梶原の店の番頭半造も大株主の一人だったので、上京した練太郎は、まず半造を口説いて持ち株を買い取った。仁礼の陰謀を察知した高之は、大阪で忍の父の池島に会い、信助が保有する大紙の株式を譲ってほしいと頼み込み、承諾を得た。その一方で、高之が持っている東紙の株価をテコ入れするため、池島から買い取った大紙株を抵当に銀行から借金して、東紙を買いすすんだ。しかし番頭の尾上が心配して、「今、売るに越したことはありません」と言って譲らないため、高之も決心して売ることにした。しかし結局は、仁礼の思惑通り東紙の株式の過半数を手に入れ、練太郎が東紙の専務として入った。高之が売った分を練太郎が買った勘定になる。

高之が大阪から東京へ戻る途中、夜行列車の中で偶然出会った練太郎と口論になり、高之が練太郎に、闇討ちのような真似は止せと怒ると、練太郎は、「株というものの欠点も長所もそこでっしゃろ。資本を持たずに株買うのは悪いけど、資本があつて株買うのに何が悪いのです。僕、銀行の代理をして金を貸してやったようなもんですが」と嘯いた。

東紙の買収に成功して気をよくした仁礼は、今度は兜町全体を敵に回す大仕事を目論んだ。仁礼は筋の通らないことが大嫌いで、北浜の仲買人の中には、かつて第一次欧州大戦後の株価暴落の際に潰れた店が多く、生き残った仲買店はその分堅実になった。それに反して、兜町の仲買人は負債を抱えていてもそれを整理せず、表面を繕っているのが仁礼の気に入らない。しかも、すこし金ができると政治家と交際したり、見栄ばかり張っている。ここで一番、東京株式取引所（現在の東京証券取引所）の株式（これを新東と呼んだ）を売り崩してやろう。そうすれば、一気に不良仲買店を整理できるはずだ。仁礼はそう考えて、計画を実行に移すことにした。

そのための手段として、兜町のどこかの仲買店を通して新東に売り注文を出す必要がある。仁礼は梶原定之助の店を機関店としてえらんだ。清子の父の店である。もちろん、梶原に異存はなかった。多大な手数料収入が見込めるからである。

新東の株価が下がり出したのを見て、仁礼の仕業と睨んだ高之は、家屋敷を抵当にして新東を売り続けるよりほかに道はない、しかし資金が枯渇すれば、それこそ無一文か借金漬けになるのもやむをえないと覚悟した。そして結局は、借金はせずに済んだものの、仲買店は閉鎖せざるをえなくなり、すべての財産も失ってしまった。兜町の仲買店も何軒かは倒産した。兜町の完敗だった。

さてここで、高之をめぐる四人の女性関係の経緯と結末についても、述べておかなけ

ればならない。

まず清子は、いつも優柔不断で腹の中を明かそうとしない高之が、はっきりと泰子と結婚するつもりだと言いつつ切ったことで、すっかり意気消沈してしまった。しかし、梶原の店が仁礼の新東売り崩しの機関店となってからは、練太郎ともしばしば顔を合わせるようになり、二人は結婚を約束するまでになる。

次いで春子は、高之よりも年上であり、父の尾上惣八が高之の店の番頭であるという関係からも、一歩引いたところがあった。むしろ、友人の清子を高之と結婚させようと考えていたふしもある。しかし、仁礼の新東崩しで高之の店が倒産し、尾上の家も財産を失ったことに逆上した春子は、大阪に仁礼を訪ね、仁礼の喉を刺して殺してしまった。

泰子は、仁礼と高之が敵同志の関係になり、仁礼は泰子が高之に会うことを嫌って、自宅で軟禁状態にした。それがかえって、泰子の心を高之に向かわせることになり、ある日、泰子は家を抜け出して高之に会うために上京する。しかし高之の家で、仁礼が死んだことを電話で知らされ、呆然とする。その夜から発熱して寝込んでしまった。

最後に忍であるが、彼女も高之に好意を抱いていたが、それよりも泰子を高之に添わせたいと思い、さまざまに画策する。忍にも連絡せず東京に行ったままの泰子から手紙が届き、それには、泰子が高之と結婚することが決まったと書かれていた。忍は泣いたり、笑ったり、寝台の上を転げ回ったりしながら、自分の気持を整理し続けた。

さて、「純文学にして通俗小説たる純粹小説」を指向した横光の『家族会議』における“実験”は、株式市場・株式相場を社会と見立て、その社会との関係において男（および女）がいかに変化しうるかを追及しようとする試みであった、と思われる。ところで、主人公の高之は、株式仲買人の二代目オーナーという設定であるが、仁礼の仕掛けた新東の売り崩し作戦に対して、経営者としてどのような対応を示したのか、あるいは、兜町と同業者達が結束して仁礼に立ち向ったのかどうかという、肝心な点がぼやかされたまま物語は終わる。

『家族会議』を批評の対象として取り上げた文芸評論家や近現代文学者の視点は、『家族会議』のモチーフの重要なひとつが、兜町対北浜あるいは東京対大阪（関西）の価値観の相違や文化の異質性の摘出にあったと指摘するが、兜町や北浜の株式市場制度、あるいは株式仲買人の気質の対立点がどのようなものであるのかについては、ほとんど追及していない。¹⁰

たしかに、北浜側の兜町に対する^{ふんまん}憤懣は、仁礼の思いを借りて説明されてはいる。

10 たとえば、小田桐弘子『横光利一—比較文化的研究』2000年、南窓社、第4章「家族会議試論」、61-78ページ。

取引所というものは仲買店あつての取引所であるからは、その仲買店の多くが負債を隠しては安全強固な取引所とは云いかねる。云いかえるなら、多くの世間の顧客を欺いていることになるのである。すでに、大阪の北浜が一度この顧客を欺いていた結果恥をさらけ出し、罪を世間に発表しているのに、東京の兜町は一度もそれをやろうとしない。なぜそれをやらぬのか。いつまで愚図愚図と世間態を気づかって、見栄を張るのか。兜町には負債が少しもないというのか。それなら、よしと、こう文七は肚を定めたのであった。……とにかく、文七には東京の取引所全部が、はるかに前から傾きかかった敵城に見えていたのだった。しかも、この敵城を覆えせば儲かることもまた確実なのだ。要するに文七の肚は、どうしても一度東京の兜町を篩ふるいにかけて不良仲買店を全部駆逐し、信用して取引のなし得る仲買店ばかりにしたい。そのためには起る悲劇は厭いとうてはならぬと云うにある。その手段としては、新東の株を底値まで叩き落とし、兜町を火の消えたようにしようと云うのであった。

しかし、これに対する兜町側の北浜に対する見方、あるいは仁礼の宣戦布告に対する対策などはまったく無視されている。わずかに高之だけが気付くという設定であるが、新東の株価が下に向かって妙な動き方をすれば、それこそ東京側の業者が鳩首協議して、防衛策を講じるのが当然だろう。それが現実の常識である。しかし、高之が同業者に情報を提供して協議を提案したという場面はどこにもなく、ひたすら高之ひとりが我が身（自分の店も含めて）の防衛だけを考えているのは、腑に落ちないところである。

しかも、もし高之に兜町を守りたいとの意志があるのであれば、新東防衛のために買いかうのが筋であるにもかかわらず、逆に、仁礼に合わせて新東を売り逃げしようとしているのも気になる。もっとも、それが高之のキャラクターであるとして、横光が人物造型したのであれば話は別である。しかし、そこまで踏み込んだ形跡はない。

そら、仁礼がやっているぞと風聞が立つと同時に、大阪の北浜から陸続と兜町へ有象無象の連中が乗り込んで来たのである。彼らは誰も彼もが今だとばかりに、仁礼と一緒に売り出したのであった。あたかも油をかけて火を点けたうえに、風を呼び起こしたごときもので、兜町は今や炎々と燃え抜って来たのである。

現在ではまったく想像もできないが、大正時代から昭和10年代前半までのわが国の株式市場は、兜町と北浜がまったく互格か、すこし北浜が優勢であったから、この小説の中で展開されているように、兜町が一方的に押し込められるという設定にも、無理はなかったと考えてよからう。なお、この当時の株式市場では、東京株式取引所の株式が市場の売買高の大部分を占めており、しかもそのほとんどが現物取引ではなく、定期取

引（先物取引）として行われていた。なかでも東京株式取引所の増資による新株を「新東」と呼び、これが市場の花形であった。また、株式の市場参加者も、現在のような大衆投資家は当時は存在せず、もっぱら相場好きのアマチュアやセミプロと、株式仲買人とで構成されていた。

それにしても、横光が何故、株式市場を『家族会議』の舞台としてえらんだのであろうか。それに対する筆者の考え方は次の通りである。株式市場や相場の世界と深い関係を持つ人は、株価の行方によって人生を左右されることがすくなくない。とくに株価暴落に遭遇した経験を持つ人ほど、ドラマチックにその影響を受けるはずである。横光は、株式市場が持つ非情な性質を、男女関係の化学変化の触媒として使おうとしたのではないだろうか。¹¹

また横光が、『家族会議』を執筆する以前に発表した作品群の中で異彩を放つ『上海』には、外国為替市場や金塊市場の状況が出てくる。横光は1928年（昭和3年）春に、約1カ月間上海に旅行しており、その時に金や為替の取引を実際に見聞して、おおいに興味をそそられたらしい。その時の記憶が、横光に株式市場や株式相場を思い起こさせたのではないだろうか。しかしこれは、あくまで筆者の想像に過ぎない。

しかし結局のところ、『家族会議』においては、株式市場や株式相場と高之ら登場人物との関わりは、一部を除いて中途半端なものに終わってしまっている。極言すれば、『家族会議』はあくまで通俗的な男女の恋愛関係のもつれが主で、株式市場や株式相場はたんなる舞台装置というか、映画のセットの書割り程度にしか扱かれていない、という印象を受ける。

この点に関して、岩波文庫版『家族会議』の解説で、佐々木基一は「主人公重住高之が、職業人としても中途半端であり、内面的な空洞を抱えている近代人としても中途半端にとどまらねばならなかったことは、現代小説一般のおかれているジレンマを象徴的にあらわしている。その意味で、『家族会議』は、現代小説のかかえている問題性を考えるための、まことに興味ある素材だといっている¹²」と評しているが、これが『家族会議』に対する批評の最大公約数であると考えられる。

しかも、横光が自らに課した課題は、「文学の社会化」であったはずであり、『家族会議』において横光が立てた道標が、現代文学に受け継がれたことは確かである。

11 この発想は、斉藤環『関係の化学としての文学』2009年、新潮社、から強い示唆を受けている。

12 佐々木、前掲書、323ページ。

IV 経済小説の開祖・城山三郎

1945年（昭和20年）に太平洋戦争が終り、戦後の一時的混乱の時期が過ぎると、大部分の日本人は虚無感や絶望感から立ち上がって、精神的な文化や芸術を求めはじめた。それに呼応するかのようになり、老作家、中堅作家、プロレタリア文学、無頼派などの書き手が一斉に活躍するようになった。まさに百花繚乱の感さえあった。筆者が戦後始めて買ったのは、小林秀雄の『モオツアルト』だった。仙花紙と呼ばれた、ティッシュペーパーのような粗悪な紙に印刷されていたため、しばらくすると茶褐色に変色して、読みづらくなったことを憶えている。

『オール読物』や『小説新潮』などの小説専門誌も創刊され、「純文学にやや通俗性、社会性、娯楽性を加えた中間小説」が、戦前から活躍していた中堅作家達を寄稿者に並べて、未曾有の小説ブームを現出した¹³。このような状況が続くうちに、新人作家の登龍門といわれた、「純文学は芥川賞、大衆文学は直木賞」という区別は判然としなくなり、純文学と大衆文学の壁は取り払われてしまった。純文学と大衆文学という従来のタテ割りにかわって、社会小説、推理小説、時代小説といったヨコ割りの文学領域区分が出現したのである。

1956年（昭和31年）には、政府自らが『経済白書』で「もはや戦後ではない」と高らかに宣言し、日本経済は息の長い高度成長への道をひた走りに走り出す。日本中いたるところに工場が建ちすすみ、あっという間に、それまで町工場同然だった企業が中・大企業へと拡大し、組織化されていった。そこで、経済というジャンルが文学の中にも入り込んでくるのは当然の帰結だった。経済小説という分野がそれであり、「組織と人間」を意識的に描いた城山三郎がそのパイオニアになった、ということができる。

城山三郎は、1958年（昭和33年）に『総会屋錦城』で直木賞を受賞し、続いて、『小説日本銀行』という長編を世に問うた。それ以後、経済小説という新しい分野に属する長短編を、長期間にわたって精力的に発表し続けた。その中に、城山が最も力を入れた「組織と人間」という視座からとらえた佳品がある。それが『鼠^{ねずみ} - 鈴木商店焼打ち事件』である。

後でも詳細に述べることになるが、城山の小説はノンフィクションノベルと呼ばれることが多い。それは、事実（あるいは史実）を忠実に追いながら、そこに小説としての色彩も加えて構成した作品のことを指しているように思われる。城山の小説には、この傾向を持つ作品がきわめて多いのが特色である。『鼠』はその代表的な例だといってよいであろう。筆者は本稿を書くにあたって、フィクションとノンフィクションの相違を

13 奥野、前掲書、210-11ページ。

明らかにすることも目的のひとつにしているのです。以下では、『鼠』を教材にえらんで経済小説の本質に迫っていきたいと思う。

鈴木商店という名もない一介の砂糖商が、第一次世界大戦前後には巨大な商社と化して、一時は天下の三井物産や三菱商事を凌駕するほどの実績を上げた。しかし、1927年（昭和2年）の金融恐慌であえなく倒産した。これは、まぎれもない事実である。この鈴木の大番頭であった金子直吉が、ほとんどこの大偉業を成し遂げた張本人だった。『鼠』は、この金子を中心とした鈴木商店の栄枯盛衰の物語である。

筆者はかつて、昭和初期に日本銀行の重職にあった深井英五の実績をいくつかの文章にした事があり¹⁴、その関連資料を読むうちに、1927年の金融恐慌で崩壊した鈴木商店のことを、ある程度は知ることができた。しかし、鈴木商店が米騒動に巻き込まれて焼打ちに遭ったことは、ほとんどの昭和金融恐慌に関する文献には載せられていない。だから筆者も、『鼠』を読むまではそのような事実があったことを知らなかった。逆に『鼠』には、金融恐慌で鈴木商店が倒産した経緯については、後章でわずかに触れられているにすぎない。城山の関心は、そこにはなかったようにも思われる。

鈴木商店の本社は神戸市にあったが、1918年（大正7年）の米騒動で本社ビルと関連会社の建物が暴徒によって焼失した。その理由は、鈴木商店が米を大量に買占めて米価を吊り上げたからというもので、大新聞も鈴木商店を悪者呼ばわりする記事を、連日のように書き立てていた。「鈴木商店は米の買占めで国民を苦しめた悪者だ」とのイメージが、金融恐慌で鈴木商店が倒産してからも、長い間定着してしまっただけである。

城山が『鼠』を書くにいたった動機は、鈴木商店に向けられた悪評が、果たして本当なのかどうかと疑ったからだった。そこで、城山の分身と思われる〈わたし〉が、その悪評が事実に基づくものであるのかどうかを、徹底的に調べることにしたのである。

〈わたし〉は、[鈴木が米の買占めをした。だから焼打ちされた]のだという事実の単純な証明が欲しい。だが、米騒動研究の決定版と言われる『米騒動の研究』が示してくれたのは、

①鈴木が米の輸出をしていたから、もうけたらうという憶測であり、つづく時期における②外米朝鮮米輸入による莫大な利益獲得という憶測であった。そして、さらに、③反対党代議士による小麦買占めの暴落攻撃があったという。

①②は、事実の誤認または拡大解釈であり、③は米と小麦のすり替えがあり、さらに反対党による政策的攻撃として割引かねばならぬ。

14 拙稿、「悲劇の日本銀行総裁、深井英五（上）」（『同志社談叢』第3号、1983年）、「高橋是清の財政政策と深井英五」（『同志社商学』第45巻第2・3号、1993年10月）、「深井英五の通貨政策論—金解禁から金本位制度離脱まで—」（『同志社商学』第51巻第5・6号、2000年3月）。

とすると、残るのは、

④買占めを続行しているのではないかと疑われ、鈴木が米を買占めて値をつり上げているという噂は世上に喧しかった、
という『新史流』からの引用である。

『米騒動の研究』が引用しているのは、その中の「米穀取引と鈴木商店 伊原大札」という論文からであった。

この論文は、『米騒動の研究』と同様の筆法で、鈴木が米の買占めをしたらしいという状況証拠を並べ立てにかかっているが、とくに鈴木買占め説の直接的な証拠となりそうなものは、『米騒動の研究』が要領よく引用しているように、この研究者たちが訊いて廻った関係生存者からの証言だけである。

論文の中から、鈴木買占めの説についての証言を拾い上げると次の通りになる。

証言（一）-「米は鈴木商店が買占めていた。青田買いまでしている。鈴木が廉売したという記憶がない」（高木行松氏）

証言（二）-「鈴木ヨネと金子を除いて米騒動は考えられぬ。米価の騰貴の最中、鈴木は小売商店にまで買占めに来た。騰貴は鈴木を買占めと期米の買占めをした石井貞一（仲買人）が張本人だ」（上田歳樹氏）

証言（三）-「鈴木商店の買占めは事実であり、一貫して買いに廻っていた」（天野又蔵氏）

わたしは、その人たちに会って、直接に訊ねてみようと思った。

こうして〈わたし〉は、その論文に記載されていた住所を頼りに3人の証人を探し出し、事の真相を改めて聞き出すことにした。ところが3人とも、鈴木商店の焼打ちについては曖昧なことしか言わず、しかも、『新史流』の掲載論文とも食いちがう点が多々あった。再び『鼠』の本文から引用してみよう。まず高木氏から。同氏は民生委員を20年間続けていた。

「…新聞にしきりに書いてましたからなァ」

わたしは、肩すかしをくったような気がした。

「青田買いという証拠は」

「それも新聞です」

「どんな新聞」

「朝日。それに又新も神戸も毎日も、各新聞で書いてたんとちがいますか」

ちょっと間を置いてから、

「あくどいことをするやつはやっつけろということになったんじゃないな」

「すると、鈴木はあくどいことをしたんですか」

「そういう噂だったな。……いや、噂じゃない。実際やっと思った」

「どうしてそれが……」

「やっとなるから、噂に流れてくるんや」

次に〈わたし〉が訪ねたのは上田歳樹氏だった。焼打ちのあった当時は父親と米屋を営んでいた。

膝頭を掻きながら、氏はまず言った。

「あのときは、うちもえらい目に遭ってな」

「鈴木が買占めをしてたんですか」

氏は大きくうなずいた。

「メリケン粉なんかを、八百屋の店先まで来て買い漁りと思った。ええお客さんと思って売ったと思ったら、鈴木が買い占めとったんや」

「米はどうです」

「米は別に買い漁りはせなんだなァ」

氏は、気の抜けたように答えた。

「どうして鈴木は、八百屋まで来てメリケン粉を買ったんでしょうか」

「いまは統制だが、昔は定期の市場があって、毎日上がったたり下がったり。売ったものはその何月何日までに現物にしにゃいかん。そのために買い漁ったんやな」

〈わたし〉は第3の証言者である天野又蔵にも会った。天野はそのとき、神戸証券取引所理事長の要職に就いていた。『新史流』の中では、「鈴木商店の買占めは事実であり、一貫して買いに廻っていた」と天野は証言している。

それを読み上げると、氏は眼をしばたたき、

「そんなになっていますか」

と、考えこむ恰好。

そして、一息ついてから、

「何しろ、学生さんのことですからね」

心外だがーという表現である。『新史流』は送っても来ず、眼を通していなかったという。

「しかし、鈴木を買占めは事実だったんでしょうか」

「さあ、その辺のことは、とても、わたしには……」

腕を組み直して、

「してたかも知れん。外米をいじっとったから」

「取引所は、玄米標準物の先物取引だから、消費者や小売の米価に直接関係しない。売りとして残った人が玄米の受け渡しをしなくてはならぬが、量はたいしたものではない。まして、鈴木は期米もやっていなかった」

「それでは、鈴木はなぜ焼打ちされたと思いますか」

「利益をあげてたから、反感を買ったんだね」

「米の買占めについてですか」

「そういう噂は、ちらほら耳にした程度です」

3人の証言を元に作成された論文を掲載した『新史流』の創刊号は、法政大学社会学部歴史学研究会によって出版されたものであるが、〈わたし〉が証人たちに来て確かめた結果、3つともが信憑性に欠けていることが判明した。証言者の真意を汲み取ろうとしない、まず結論が先にあって、そのために3人の証言を都合よく使ったとの印象を受ける。しかし、いったんこれが『米騒動の研究』によって引用されると、鈴木商店焼打ちの確かな資料として、ながく引用され続けるにちがいない。城山は〈わたし〉に、こう言わせている。「歴史書に愚痴をこぼしても始まらない。歴史にも野合がある」と。

一介の砂糖商にすぎなかった鈴木商店が、第一次世界大戦を絶好の商機ととらえ、一時は三井、三菱と肩を並べるほどの大商社にのし上がったのは、大番頭の金子直吉の積極経営が功を奏したからであった。しかし、この金子についても、放漫経営を続けたために鈴木商店が崩壊に追い込まれたのであり、資金を台湾銀行に依存したことが、結局は台湾銀行も道連れにしてしまったなど、金子に対する世間の評価にはきびしいものがあった。城山は金子へのこのような評価についても疑問を感じて、鈴木商店に関係していた人達に会って取材し、金子の人となりをも肯定的に描き出している。

やり手の番頭と、米の買占めというあくどい商売—愉快ではない、焼打ちも当然。そしてアブクのように消えたのも歴史の摂理と、〈わたし〉は何の興味も抱かなかった。見向きたくもない—企業の話であった。

〈わたし〉は、「鈴木商店」を簡単に斬捨てて歩いてきた。今後も、しらけた気持でしか、その名を聞くこともあるまいと思っていた。

それをこわしたのが、某大銀行の部長をつとめる T 氏である。

蝶ネクタイのよく似合う T 氏は、亡父が鈴木商店につとめていたというなり、珍しく頬を染めるようにして、しゃべり出した。「ふしぎな会社でしたね。もっとも、私

の知っているのは、潰れた後のことですが……。残党の集まった整理会社に行くと、学資の足しにと、おカネをくれたんです。どこからどう出てくるのかは知らないが。同じ会社仲間の遺児だから、面倒みてくれたんですなァ。……暗い穴蔵のような小さな事務所の奥には、大きな寫眞が二枚飾ってありました。『お家さん』と呼んでいた鈴木の人妻と、それに、金子さんの寫眞です。少人数しか居ませんでした。その寫眞を守るようにして働いていましたな。いえ、ただ主人だったから仰ぐというんじゃないんです。金子さんという人、社員の人々にとっても慕われていたんですな。りっぱな人だったらしいですよ。きまじめな。当節の言葉で言えば、道徳教育の見本といった人だったようです」

そんな金子が、第一次世界大戦が勃発したとき、鈴木商店の会計主任に次のように命令した。「今日以後は、鈴木店の信用と財産とを十分に利用して出来るだけの金を拵え、極度の融通を計って貰い度い。又如何に行詰るとも、自分の戦闘力をにぶらせる様なことは言つて呉れるな。盲目減法だ。驀^{まっしぐら}地に前進じゃ。いよいよいかぬときには俺にだけソツと言え。鈴木の大を成すは、この一挙にある」。

これは、金子柳田両翁頌徳会『金子直吉伝』から、城山が引用したものだが、金子直吉のこの進軍ラッパで鈴木商店は拡大したものの、崩壊にもつながったのである。『鼠』は金子の猪突猛進ぶりと、それに抵抗する〈高商派〉との軋轢^{あつれき}を軸に、鈴木商店の興亡を生き生きと描き出すことに成功している。とくに、金子の生きざまを見る城山の眼差しには暖かいものがある。

それにしても、城山は『鼠』を書くために延べ300人もの関係者に会って取材をしているという¹⁵。徹底した取材が、城山をノンフィクション・ノベルの作家と呼ばせているのだと、つくづく思われる。

V ノンフィクションとフィクション

1 ノンフィクションの存在意義

城山は佐高信との対談の中で、『鼠』の創作動機についてつぎのように語っている¹⁶。

「僕が『鼠』を書いたときは、告発するとかしないとかじゃないからね。米騒動の焼打ち事件で有名な鈴木商店というのは、悪の権化みたいに言われているけれど、その経営者の金子直吉は人間的に素晴らしい人だった。経営者の社会的役割というもの

15 小松伸六「解説」、城山三郎『鼠』（文春文庫版1975年）、359ページ。

16 佐高信編『城山三郎の遺志』2007年、岩波書店、173-4ページ。

をよく心得、私欲もなく、社員を大切にした。このため、没後何十年経った後も、元社員たちが慕って法要を営んでいると聞いた。その人が悪の権化という。この矛盾は一体どこからくるのか。告発するもしないもなく、とにかく少しでも本当の姿を知りたい、真実の姿を知りたいということから入っていきました。とくに告発しようと思って書いたのではないですよ」

鈴木商店に対しては、焼打ち事件の前後にマスコミとくに大新聞が、鈴木商店が米を大量に買占めて価格を吊り上げていると追及し、連日のように非難を続けた。その先頭に立つリーダーが金子直吉だというのである。城山は当時の新聞を精読して、「果たして本当にそうなのか」との疑問を抱いたことが、執筆の動機になっている。城山はこの点について、こうも言っている¹⁷。

「ノンフィクションの存在理由というのは、マスコミなんかの大きな世帯では書けないことをノンフィクションは徹底的にタブーなしでやれるということ、それは非常に大事なことだと思う。……やっぱりノンフィクションで書く以上は、マスコミでできないことをやるという、それはマスコミの姿勢を正す正さないじゃなくて、マスコミじゃ書けないことを書く。だからそういう必然性はあると思う」

続いて城山は、同じ佐高との対談の中で、ノンフィクションを書くには対象（主人公）の中に入り込んで、徹底的に取材をすることがなによりも大切だということを強調している。それは、ノンフィクションの意義から言っても当然のことと思われるが、この点に関して城山は、トルーマン・カポーティの『冷血』を例に上げている。カポーティの『冷血』は、カポーティの作品の中でも白眉といわれるが、これは、作者がある地方都市で起こった殺人事件を調べて書きたいと思い、現地に滞在している間に犯人が逮捕された。カポーティは犯人と接触して取材しているうちに、2人の犯人にすっかり信頼されてしまい、とうとう犯人自身が知らないところまでのめり込んで書いている。城山の言葉を引用すると¹⁸、

「(カポーティ)自身はその二人よりももっと真実を知っている。Aはこう言った。Bはこう言った、AとBの証言をとって、合うところは間違いなく真実。合わないものは、間違いというよりも、自分でそれを深めていくというわけだね。Aの言い分とBの言い分のなかで真実に近いものはどれだろうということで、それはA

17 同書、174-5ページ。

18 同書、178ページ。

に寄る場合もあるし、Bに寄る場合もあるし、AでもBでもない場合もある。そこまで深めていくということをやる。ということは、二人よりもっと深いところ、鋭敏なところまで知りうることができるとカポーティは言っている。要するに相手のなかに入り込んで徹底的な取材をやるのが、まず大事なんだということでしょう」

城山の作品には、明らかにノンフィクションと呼べるものと、これはフィクションではないかと想像できる作品とがある。それでは、ノンフィクションとフィクションの境界はどこにあるのだろうか。この点を佐高が城山に問う場面で、城山はつぎのように答えている。¹⁹きわめて興味深い発言であると、筆者には感じられる。佐高が、「城山さん、ご自身のなかで、フィクションとノンフィクションって境界は意識されますか？」と問うと、城山は、

「そういうことを意識しないからね。ノンフィクション書くとかフィクション書くとか。しかしフィクションのときは、実名は使わない。そういうときには、その人物が持つ美学に打たれて書く。だから現実にその人がどうであろうと知らない。この人のこういう生き方を書きたいということですからね。だから、佐橋滋さん（『官僚たちの夏』のモデル）にも会わない。横井英樹（『乗っ取り』のモデル）にも会わない。主人公には会わないわけです。会うと、それはノンフィクションかもしれないけれども、美学を託することはできなくなるということなんでね、それはフィクションの発想だろうね。その主人公の持つ美学とでもいったものを書きたい。フィクションへの志向が優先しているから、そのフィクションを妨げるような、たくさん材料を持っている当人には会わない。ごく必要な情報だけでいい」

筆者もかつて、横井英樹について、「株式を買占めて会社を乗っ取るのは、倫理的に許される行為ではない」と自著に書いたことがあり、その折、²⁰城山の『乗っ取り』を檜玉に挙げて批判した個所があった。他人の著書を批判した以上は、その内容を相手にも知らせておくのが道義だと考えて、その自著を城山に贈った。すると、城山から返事がきて、その中で大要、「自分は若い時の横山英樹（乗っ取りの当事者）の所業に、スタンダールの『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルに似た男の美学を感じた」と書いてあった。その時は、「何を自分勝手な」と憤ったことを想起するが、今回、『城山三郎の遺志』を読んで、城山の真意を知ることができた。

19 同書、183 ページ。

20 拙著『株の経済学』1984年、PHP 研究所。

2 史実と虚構の葛藤－松本清張『西郷札』

すでに、これまで述べてきた通り、城山三郎に始まるとされる新しい文学領域である経済小説は、その対象が経済という動態であることを前提とした現象であり、あるいは事件であるため、基本的にノンフィクションが中心となることは首肯できる。しかしそこには、作家の想像力が入り込む余地も十分にあることは、他の文学領域となんら変わりはない。ここで取り上げるのは、経済事象を題材としている点では経済小説の範疇に入ると思われるが、きわめてフィクションの色彩が濃い、松本清張の『西郷札』である。

まずは、山本兼一の『西郷札』評を聞いてみることにしよう。²¹

「史実を小説にするとき、肝心なのは、どこにフィクションを滑り込ませるかという虚実皮膜の按配である。『西郷札』は、それが完璧で、まさに手本とすべき作品であった。歴史的な記録には、事実しか書かれていない。その事件の裏側で、人々がどのように熱情や嫉妬を燃やし、どんな恋をしていたかは、闇のなかだ。その闇にこそ、歴史小説が成立する余地がある、と眼が開けた」

『西郷札』は松本清張の最初期の作品で、1951年（昭和26年）に『週刊朝日』春季増刊号に掲載された、同誌の懸賞小説入選作である。そのときの選者であった木々高太郎の推薦で、『三田文学』に寄稿した「或る『小倉日記』伝』によって、1952年下期の芥川賞を受賞している。したがって、この『西郷札』は松本にとって処女作といえる作品である。

『西郷札』の冒頭で西郷札とは何か、という百科辞典の解説が出てくるが、これは間違いなく事実であろう。西南戦争で政府軍に追われて宮崎に逃げ込み、退路を絶たれた薩軍が、食糧や備品を調達するために止むを得ず不換紙幣である軍票を発行した。これを西郷札と呼んだのである。この小説は、西郷札の製造にも携わった主人公の青年・植村雄吾が、西南戦争終了後東京へ出て人力車夫の仕事に就いたことが、彼の運命を大きく狂わすという筋立てになっている。最後まで西郷札に翻弄され続けて、破滅に追い込まれるのである。

この作品を何度読み返しても、山本が言うように、「虚実皮膜の按配」が絶妙のためか、どこまでが史実でどこからが虚構であるのか判然としない。『西郷札』新潮文庫版に解説を寄せている平野謙も、その辺りのことをつぎのように記している。²²

21 山本兼一「『西郷札』完璧なる虚実皮膜の按配」、『日本経済新聞』2009年7月1日付夕刊。

22 平野謙「解説」、松本清張『西郷札』（新潮文庫版1965年）、473ページ。

「明治十年の西南戦争のとき薩軍が軍票を発行して、それを世人が西郷札と呼んだのは、たしかな史実に相違ない。しかし、その不換紙幣を軸として、そこに一篇の物語を構成したのは、すべて著者の想像力によるものか、あるいは物語に近似する史料そのものも現実に存在したのか、は私にはよくわからない。ただ主人公が人力車の車夫となったとき、戦禍で行方不明となった義妹とめぐり合う筋立てを中心とし、義妹の良人たる高級官吏のために謀られ、知人、恩人ともども破滅させられるという物語のタテ系は、著者の想像力の所産にちがいない」

西郷札の発行や流通あるいは西郷札に関連した確かな資料が、どこにどれくらいあるのか、筆者にも掴みどころがないが、熊本県下の史料探索にも関与してきた猪飼隆明によれば、²³「西南戦争の戦時および戦後の地方行政に関する史料は各県図書館にある。熊本県なら熊本県立図書館（「熊本県公文類纂」）、宮崎県なら宮崎県立図書館（「古公文書」）に膨大な文書が保存されている。ここには戦禍をうけた村々の報告、戦後補償を求める上申の数々など興味深い史料がある」というから、本気で西郷札の研究に取り組もうとすれば、かなりの成果が得られる可能性はある。

しかし、それによってある程度の史実が明らかになったとしても、松本の『西郷札』の評価になんらかの影響を与えることにはなるまい。経済小説にフィクションがあっても、それはそれで当然のことだからである。問題は、史実と虚構の葛藤をいかにして破綻なく収めて、バランスのとれた作品に仕上げるかにかかっている、というべきである。

VI 経済小説の展開—結論に代えて

経済小説という新しい文学領域の開祖は、既述した通り城山三郎であるというのが通説になっている。城山が『総会屋錦城』で直木賞を受賞したのが1958年（昭和33年）で、その時期は日本経済が高度成長路線をひた走りに走りはじめた頃であった。それは経済成長をリードした大企業がさらに巨大化して、組織と人間との関係が複雑化する過程でもあった。そこで城山は、もっぱら「組織と人間」をモチーフにした問題作や話題作を、つぎつぎに発表したのである。

城山に続く経済小説の後継者には、たとえば梶山季之や清水一行などがいるが、彼等はどちらかといえば企業小説とか産業スパイ小説（梶山『黒の試走車』、『赤いダイヤ』、清水『兜町』）といったジャンルに方向性を見出し、通俗性の強い作品を書いた。

1980年代後半のバブル期やそれに続く90年代のバブル崩壊期になると、メガバンク

23 猪飼隆明『西郷隆盛—西南戦争への道』1992年、岩波書店（岩波文庫）、182ページ。

の再構成をめぐる金融小説が出現した。その代表的作家が高杉良であり、彼の作品には、出世作の『大逆転』や代表作の『小説日本興業銀行』、さらにその続編ともいえる『銀行大統合—みずほフィナンシャルグループ』などがある。これらの小説はノンフィクションノベルであるが、高杉の場合はすべて実名を用いている。しかし、すでに物故者ならともかく、生存している人のことを書くのであるから、その分、迫力は増すにちがいないが、取材や描写が大変だろうと察せられる。時には訴訟に持ち込まれることもあるにちがいない。

事実、高杉も佐高信との対談で、「たとえばぼくが、少しばかり思い入れたっぷりに書く。あるいは増幅して針小棒大に書いたといたしますと、たちどころに反応が返ってくるわけです。そこはちょっとおかしい、事実はこちらだ。あの時、あの人はこんな風に言ったんだ、という具合にね。取材も大変ですし、ノベルとしての面白さも出さなくちゃいけないわけで、折り合いの付け方が非常に難しい」と述懐している²⁴。

そういえば城山も、『小説日本銀行』を書いた時には、実名を伏せてフィクションにしたが、それでも相当な圧力がかかったり、ひどい中傷もあったらしい。その辺りのことを、再び佐高との対談から引用しておこう²⁵。

「……誠実で、使命感と現状の矛盾に悩むというあんな日本銀行員はいないって言うんだよね。主人公なんですけどね。日経新聞だったと思うけど、そういう内容の批判を大きく載せたんだ。あんな男は日本銀行に絶対いないと。絶対いるかないか、そんなこと関係ないんだよ、フィクションは。だって、あり得べき姿を書くんだから、だからフィクションにするんですよ。そういう意味合いがわからん人が、こんな男はいないから荒唐無稽な話しだなんて批評するわけ……本当にいいノンフィクションを書こうと思ったら自分を消さなくちゃだめだよ。それから何か文句言われても書くという意志が大切ですね」

このことは、かならずしも経済小説に限って生じる問題ではなく、いずれの分野のノンフィクションとフィクションにも当てはまると考えられるが、とりわけ経済小説の場合は、どうしても組織の中の人間が対象にされるため、よりデリケートな問題が生じやすいといえるかも知れない。徹底した取材と描写の配慮という矛盾した問題をいかにすり抜けるか、そこに経済小説の醍醐味があるとも思われる。

さて、近年の経済小説は推理小説ブームの現出とも相まって、経済ミステリーとかフィナンシャルスリラーという分野にまで、その領域を広げつつあるように感ぜられる。

24 佐高信「解脱」、高杉良『銀行大統合—小説みずほ FG』（講談社文庫版、2004年）、519-20ページ。

25 佐高編、前掲書、185-6、188ページ。

たとえば、幸田真音の『小説ヘッジファンド』や『日本国債』などがその範疇に入るものと考えられる。経済がらみの犯罪はいまや日常茶飯事の感があり、しかもそこには、巨額の金かねに対する欲望がうごめいているため、殺人事件を推理するのとはまた異なったストーリーの組立が要求される。さらには、その道に精通していなければ書けないという問題もあるはずである。このことから、経済ミステリーの鬼才や逸材が次つぎに現れることを、切望しておきたい。

最後に、児玉清による経済ミステリー作家の三条件を紹介して²⁶、本稿の結論に代えた。いわく、「第一に、専門知識に精通していて、未知の世界に読者を誘ってくれること、第二に、ストーリーテラーとしての十分な腕前を持っていること、そして第三に、人物造形に優れた書き手であること」。

完

26 児玉清「解説」、幸田真音『日本国債』（講談社文庫版 2003 年）、350 ページ。